復讐
奇談 安積沼

三

へ遠13
1856
9

へ遠13
1346
巻 3

本清

播小平次死霊物語 復讐安積沼 巻之三

東都 山東庵京傳著
門人 拜田泥牛校

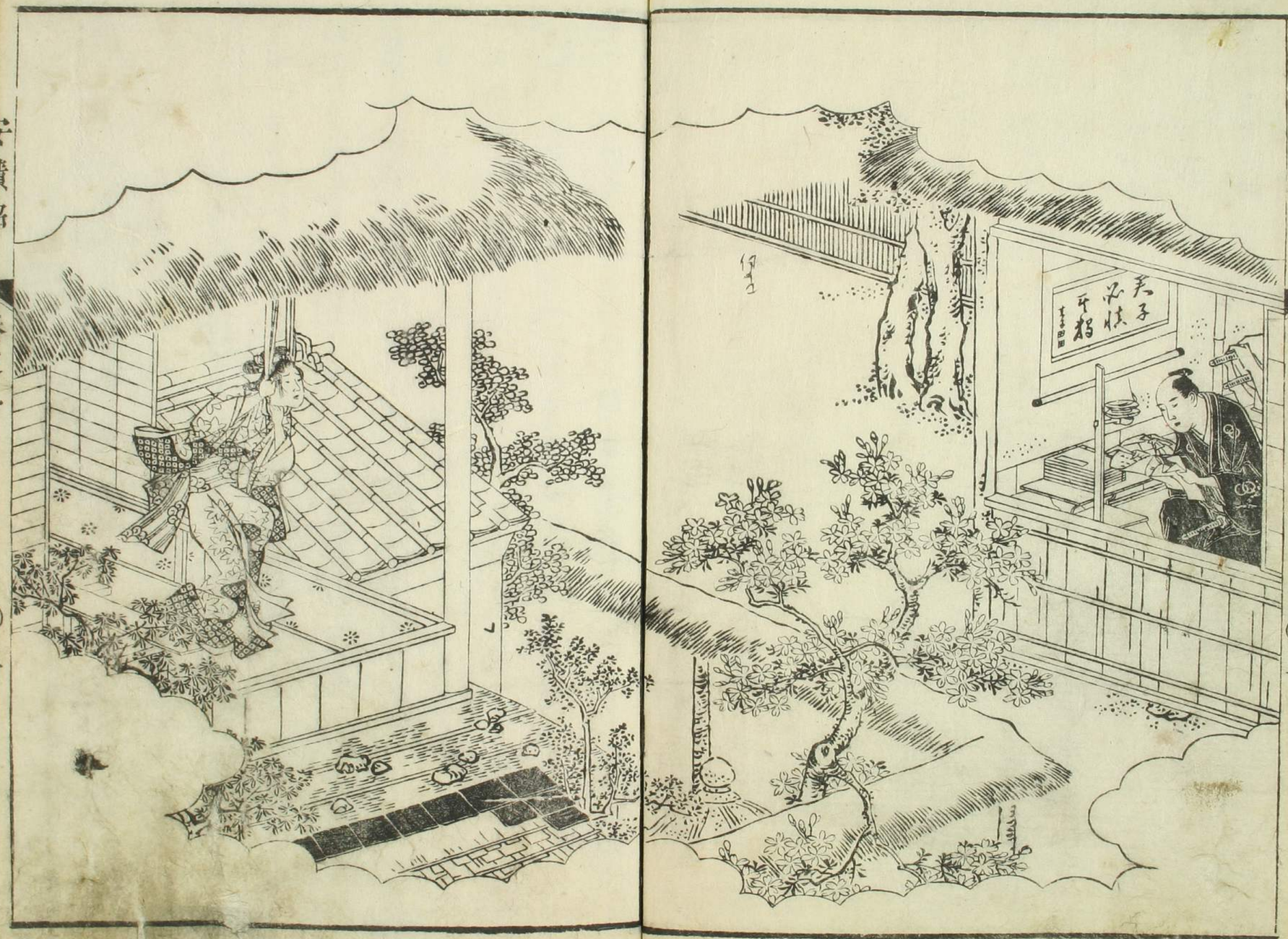
第五條

希婦細布暗媒佳會事
并 信夫摺絹注血告想事

山井彼門いあけくれ。仇人雲平がゆくゑを尋出さんとやとゝぶを
苦しめる郷ふ陸奥に逃ひりて彼地ふかくれ住ゝ尋出して雪立
ごくに思ひいそぶハしく家をしうをきあつるけき
にひりりぶ。仇人南郷ふありしの空ひてごすやらあるあ

不とせずぐ。胸あひぐさるぐれうめるあり。麦ハ又ハ豆に須賀
屋三七ろう高人あり。ハ所ろう青表の藩ハちりけ
國の土産信夫摺の絹。安達絹。細布。紬紙布。陸奥紙。十符
の菅蓆のとぐひまでも。買あつめ。諸國に松まりしてこれを
ひさぎ。家ぐ富ぐ富ぐ。ぐ。ぐの女児をもちて名をお秋
とよぶ。年ハ已に十六歳。鄙人ハいとめづらしう生れて。容
のみやびやかなる。梨花ハ雨をそぎ白玉に香をそめぐ
ぐ。ぐのぐ。ぐもぐ拙ぐ。書て。歌学のみもおぼえ
ずけぬ。妹ハ原都人なれしゆゑに。是をのこをおろく

て。彼にとゝえ。言語も都のものいひと学ぜれば。國ぶりのゞみすることを
ざるハあゝでさるゞ。雲のハりひやうる声に似ぐ。のちくゝとき
婚こゝせんゝて。父母添くめでいろくゝみ。家も貧しゝれ
ばいろよれ衣を着せて。よく粧ハせれば。ぐ。ぐく都人ともぢ
ざる姿。かくうゝくゝき女児なれば。安積のぬまれあやちぐさ
ひく人ゆゝく。迫き村くれ若人等。衣ぐひて。まに要るをを
あゝゝ。ども。皆田夫野人のむくつけき老て頭の毛ハきざ
み昆布とかつぐぐいぶぐ。頬髭ハ獺。虎皮の覆面ぐぐ
ごとく。皆腦脂獣の眼ざしに似て。蝦夷。熊のやうにあらく
しき男ぐもれば。ぐ。ぐ。ぐて。お秋ぐ。ハ。ぐ。門
ふゝえざる媒人の杖も。祓木の立ぐ。ぐ。お秋ぐ


天子
必恢
平都

小楼上に住て。細布をおることを手わざとして世わたりぬ。此楼と波門が家とむかひ合たるハ。此一件の珍事を惹出すべき端なりけり。一日お秋楼上より。偶波門を臨見るに。村落人の目なれことなきに。目馴ざる美男なれば。忽心迷ひ其おもかげそふる人のもあるなるよと。魂そゞろになりて。さながら酔人のごとく。志だらぬ恋路にまよひぬべうなりしが。此日より恋の主擔をおひそめて。おもひハ胸にみちのくれゐにて思ふとえぞ知らぬ。壺碑かきつくしても心のかぎりをかきだに傳へがたく。艶書をおくることも度かさなれども。波門ハ大望を抱ひ。此時の間も仇のことを忘ざれバかゝる放逸のことにハいさゝかも心よせず。千束の通ひせし文も。阿武隈川の埋木となして一言の返答もせざれば。つひに此年もくれぬ。お秋ハ只波門がつれな

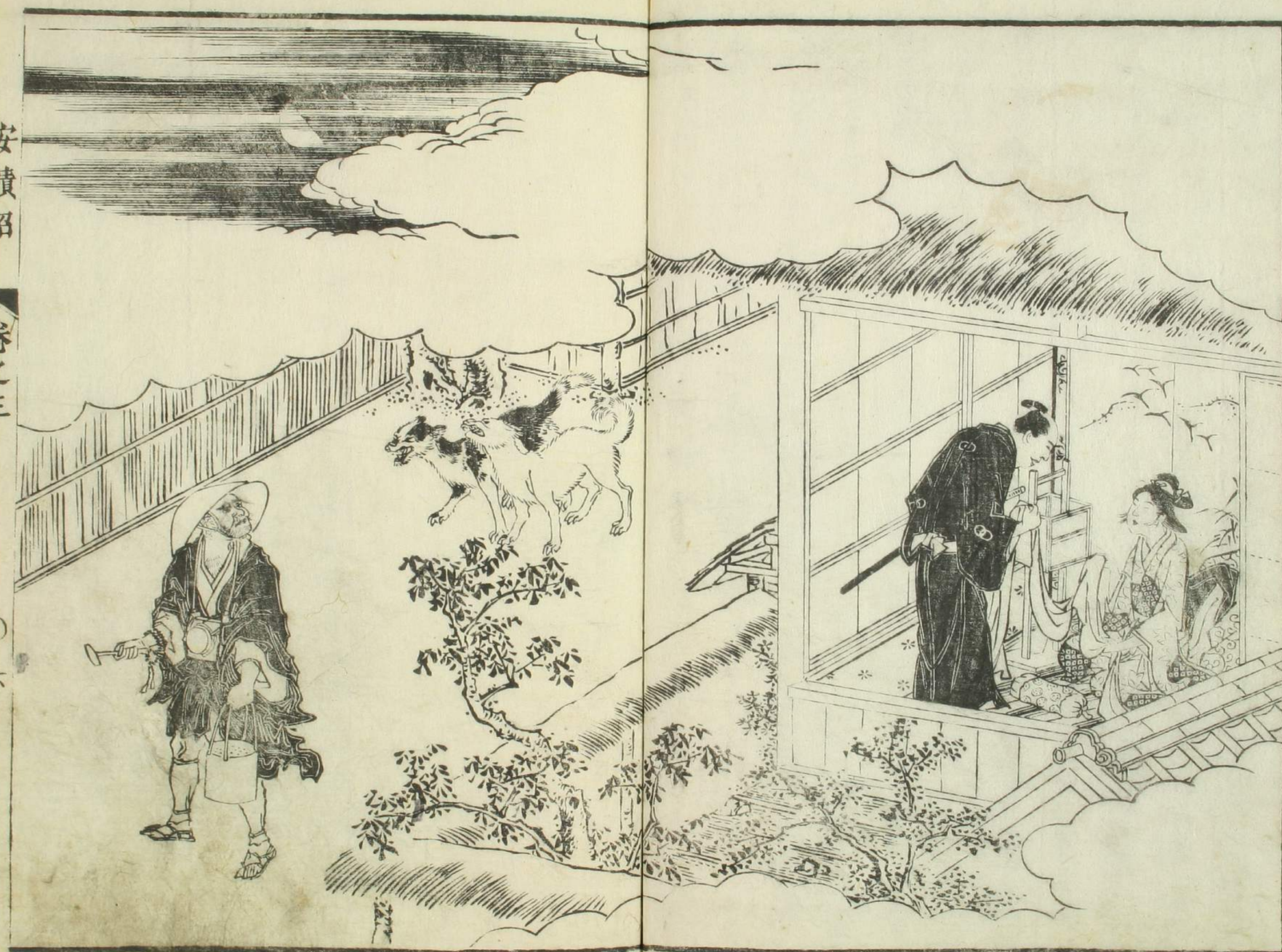
きを深く恨みけれども。磐提山に年をへて朽や果なんと涙ハ袖に乱落て。白玉の緒絶橋の名もつらく。人の心の奥の海のあらき礒辺によする松もながらへとげられぬおもひとなりぬ。一夜波門窓の下に書几をよせ燈火かゝげつ。書を讀て居たりしに。何やらん机のうへにはたとおちぬ。怪しとおもひてとりあげて見るに釵に見なれたる物あり。頓てひらきて見れば信夫摺の絹のきれに血をもて書るいまだ見ざりしわかれぬお秋が筆にて其文に妾郎人の心をうごかす身となりて。人を恋ることかなしかりければひきかへはづるもうべなれど。女子の身そてひとりしもすことの数〱を告さこひされば。何の顔ありてよいきながらふべきやかくて恋死んもあるべし命なれば。今宵縊て死んとしんをさだめぬ。妾泉下の人となる

なかなかに露ならぬもあはれと思ひしられけりと、かくすきものは佗ま
山下なる葛のうらみをこめ切なる心をこるやうにのべてかの家に
一首の歌をかきつけつ

安積山影さへみゆる山の井の浅き心は我思はなくに

波門つくづくよみかへして思ひけるは。これは萬葉集にのする所
陸奥にて。むかし葛城大王陸奥国にくだりたまひし時。采女なりける女の
よみて奉りし歌なり。歌の様を山井といひ。彼が名を秋といふより
山の井の秋とつゞけたる此歌をかきそへし心の素とおもはるゝことぞ。又彼
夫摺の絹にあるせしかうたは、それ思ひを忍び来ぬるの謎なるべし。
此返事は西暦ともちゐたる事へあろて。假字とよむ人ぞおほく
ときつけたり。かゝる鄙人にはめづらしくやさしき心ざまなりことにかく

むなしく思ひつめたる心をとゞめて。非命に死なさんは便
なしとやおもひかへして、ひと日ごろの縁もとゞめけ。前後を
えらびていそがはしく返書をしたゝめ。文箋よくしたゝめけるて。
彼楼上を的になげあげたり。お秋はおそく縊死んとせし
処におもひかけず波門が返書を得て。微に甦りたる心ちし。急
ぎまどひてひらきみるに。心の底をこまやかにのべて。今宵三
更のころ楼上に忍びのぼらん。首尾よく其の人まちけるとかゝれたれば。
おもはずあらはれし心にこれ心頭突くと跳りて。よろこぶにもさけびあへなんとして。
只夢かとのみぞ思はれける。不ど三更の鐘もひゞきければ。波門は
人の寐しづまりたるを窺ひ。梯をよぢて窓に入りけ。つひに楼に忍び
のぼれば。お秋は待わびつるよろこび。波門にひしとすがりて胸にち



さる日ごろの恨くせきくる涙にあらハせろ。波つも宏未にあらざれ
ど彼が情のふかくふかめて只脊とあでゝあるとるる。袂もやゝ更ぬれバ
お秋波つが多紙携へ鶯衾にいざなひて日来の幽情花月乃
佳會娯樂あげてつくべらず。只一て襄王の夢醒てあがらく互の
志とくらるに春の夜のあけやすく。嚮月影傾斗星闌干
こしてなや曉にちかりれば波つ驚て別出なんとを。お秋袂とひろ
て

おもひあまるとあハるれども細布のむよあひがたれ袂ぞうるさ
ようみてうちりれば波門も一絶と吟して別を成そむ

偏憂合歓夕　頓有別離時
自嗟還自慰　不是遠別離

お秋これと安てよろこび。多織の細布と把て。　広樓に梯を
うけ。かゝ人のやさうひに足ゆられ。　命遁ひ易ゝ。妾先樓の秋に員木をそなへ広布と以て求ハ
員木にかけ求ハ樓の下ホ垂ゆ。永広布をよかとして緊
とさ人多人妾上ホて所上ヤさバ人目れかゝることあるゆ。波門がゝ
く。其員木とふい何物ぞ。女の弱さ力ホて我をうるあるゆ。おそらく
ハのふまゝ。お秋笑て。夫員木を多ゝをあるゆもことうあるこれハ
農家ホある器ゝ。九き木と謂。おとうけて知ゝ力をそなひ
て。重とうごゝ物碾輪のさゝひの差あるゝと共れが波つうゆつきて
られきハあて良計うといふ。お秋又いうく。夫がつれゆんを脱ゝて
溢死んと思ひ付ゝも広布あり今亦広佳令を媒とゝを広布あり

禍うて福となりぬるこのうれしさよりまさる人なし。彼つハもちろん彼が志の厚きを感じて。つひに別れぬ。ながらしろ浜ハ絹のごとく布にさらさく君び入り剛布を收めかくし。歸る時ハ又これを垂て梯を呼び下り。互に志の深きこと。山盟海誓して水ゐるまでくぞ忘れじ。ぬくて晴期を指して君び遇ことを已に半年にあまりぬるを。その名ども忘れて式ことを知れども。只お秋が父母のゝ家なりも彼つハ原来お画ゐ嫁くの粧奩ふ遠しゐ人に式所彼和の酒宴の席にまねかれるが。それも仇人と探る便もなるべきうとおりひてうらふしさ式へとハどまれうれ行ぬ去るれ一日近き速諸とうふ不の某が家ふ中さて繪をかさるるあるしゞあるゞ酒肴をとゝ夕人夜深まで きゝてすゝれば。波門ハ式夜お秋と約せしことをうたがゝ

忘れさう爰に又一人の僧に現西といふ者あり夜く祇と夕らし念仏とゝなへて村くとあるきものうちを乞るが式夜三更のころ三七ゞ家のおとゝろざらて搆ふ細布の地ふ垂ふ紙見ゝけ式家布を晒ゐきて。忘れて取收ざるものかゝん。これを偷ぶに式酒代ゐるべしと式ふ黙頭。ひそに立ようて布にまとゐる布ふ。樓上に人あるて忽弟上ゝ夕ぶ。式僧驚きこハ何ゐぞ。ゝ夕ふうち漸ゝに扯上られ傍ふんつきてこれい必式家に不義をゐると女あるて。私夫を搆ゐるべしと思ひつ。彼に任せて勇上られ。已に樓上にいる時果して義麗女児あるて。式布をとゝ夕器ゝ夕。是乃お秋ゐる。況西ゝのうちにようこび。女児ふむゐいていひゐハ愚僧ハちゝろ他郷ゝ式里に移来れば。君がごゝ式美人

安積沼
卷之三

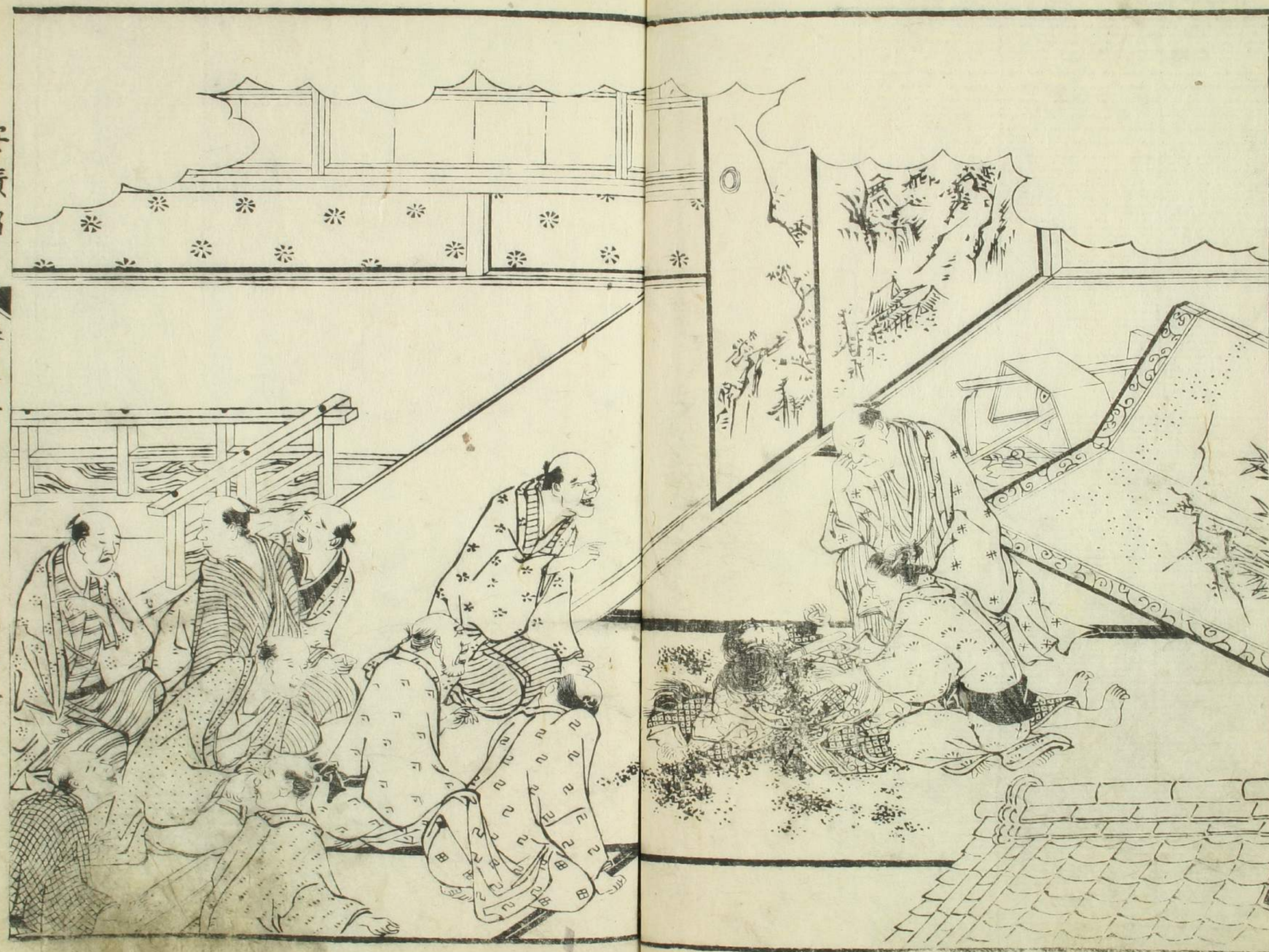
こゝにあることゝ成ゝを聞るに今男ひとりけだ。武士へ呼上られて。
男女の姦と見るハ誠是源氏因縁あらん。もし今夜愚僧ゝ一
宵の宿をめぐみ給ハゝ。福田ハ海のごとく恩徳ハ天ゝ山とし
るべし。偏に慈悲をゝれ給へといひつ。身をゝゝてよろゝとひけばこゝ秋
ハ大に驚きて武僧を窺るに。まゝき阿闍梨とゝ海松のごゝゝに孤と
なる衣と着し。面ハ鴉の底に似てくろ〳〵。眼ゝるぐ〳〵髭がらゆてこゝぐ
〳〵悪僧なれば一目みるゝも只うちゝかくきて居るゝ。粥ゝんと志
づめていろ〳〵。女子ひとりとあかどゝて。ゆゝるゝあることといひ給ふ。妾今
書風のごゝゝに縁と得て。そのゝゝとこそ待るにいそゝゝ井身のごゝゝむさ
げ身出家に成身と笑んやさゝいゝ井身とゝゝに承上〳〵ハ妾
が誤とあれば枉て武布をめぐむべし〳〵れとゝて速に武襦と

立去ゝゝゝ。祝西がいはく。原我好ゝて武襦ふ上るにあゝ〳〵君ゝ
づゝゝ恥をゝれ承上ゝて。今れいゝゝてむゝくゝれゝゝ行ゝ。
布とゝて行ゝゝ。見非恥ゝ不ゝゝ。ひゝゝゝゝいひてゝゝゝゝ抱ゝ
付ゝゝゝる梨の腮を以て。お秋が新ふゝゝゝ。眼をわゝして鼻ゝ長ゝ
吐られバ。お秋ハ只皂雕ふつまれゝる紫燕のごゝゝに身をゝゝゝのゝれん
とゝれども。祝西ゝゝ抱てゝゝゝゝゝ。お秋ハゝゝゝものゝゝゝと身をあせゝ
れば。裙ひゝゝゝて白脛をあゝゝ。衣ゝゝゝゝゝ蓋抱。いとけゝゝゝゝ
ゝて。祝西ゝ鼻と襲ゝ行を以てゝゝゝ去のゝゝゝ。ゝゝゝに春心發動
恰も餓虎羊羔を見つけるごゝゝのいきゝひゝて。自ゝれと制
ることゝあゝハどゝむゝ。むゝに捻倒ゝゝ倒ゝゝゝゝみゝゝゝゝゝゝと
おゝんゝゝとお秋ハゝゝゝ声とあげ。賊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

此時しも夜深すれど家内こぞて熟睡し。氏声と安付どぶ秋。
いろか声ぐるぐるりるあそ。現西八人の起来らんらん氏おそれ気
にせるりてかさいにあり裁刀とひろひしろ。お秋が吭にぐさしつさ
さてられば。阿と一声叫び。鮮血滴々とうさ流れて笑ものこさと
散もちぢめまさうの花の姿と。忽暴風猛雨のしもにそそうひ香散
ぐ玉砕てうぐふ十七歳と一期し。泉下の客しハうりれうう。
嗚呼哀哉嗚呼痛哉正是三寸氣在千般用。一旦無常萬事休と
いるさぐひするべし。かくて現西お秋が頭上よりはらしが瑇瑁乃
櫛と髪掻と奪取かの布とつくひて樓とちう足とそうて逃失りう

第六條　小鹿小平次巧賊僧事
并山井波門月夜殺悪棍事

次の日早飯をくるまでお秋樓を下らされた。母親あやしく樓ふ
上りてうるはこいうにお秋ハ殺もて血泊の裏に横り居られば大に
驚て魂そらに死。あわてしく樓を泣ありてうくにかくと告れし
ば。父三七どちらじゃ。家内の者ども。ひとしく橋ふあつはりて。うくと
ちうくと騒ぎりう。父母もろともにお秋が死骸をあらしあるうに原
あづに裁刀うて。吭と無理むりハうつぬきられば肉白くくぜて疵
口ようりうみ出し。鮮血ながれて渾身をくれれに染あ。歯をくみ
しめ瞼とあハさぎ赤の巻紙をくふぎりてあさはしく死居さ
さそくるしかりつくん。おりひやまて父母ハ。死骸ふひしとをう
つうて声とあげて哭號こハ夢ううつうるさけやといいて。牡人の
ぐくくるひ。目もあてられんあうさ。鄰家の者も出ると安つけ



てさぐてこゝ七が家よつどひ行者の所為なるや更に縁由知まゝされん。
評　後まちくるる迎ふおのゝ村ふ住為六と云原来悪根
ふてあらしがねてお秋と為まくしい為ぐ絶出とおくられもうけひ
ぢ。ふりて波つと通ゝるこゝ成ふく迷惑ふおもひ。扨とわてゝ仇と報
んとおもひ為るしがはるとなつあて幸の村と仏中にろこゝ。ゝ家に
ろせ来ろ三七にむくいていひるハ。むくいの家に住浪人山井波門原足
下の女兒と為通して山樓に忍び通よこゝ半年に余れり。我人のうる
と為して。昨夜波つ迷踏の果が家よあうて酒と飲しをかゝ已が必彼
酔に乗ゝて山樓に忍び。女兒のんと為ると振て殺しるにろこゝ。ひ
ゝと告られゝ鄰家の老ゝもも已半波つとあるむりのあらにとゝき
しゝひて為六のいゝ所おしもさうべくゝとぞいひる波つハゝ強勢

と夢にぶ知ゝぶ。ゝ日未明より安佐虫の温泉よろうて家よあゝ
ざるれハ三七夫婦いろゝあゝまゝんいゝで怨恨ざん多ゝ告状と云知縣廳
前よさゝひて事の子細と訴ゝ知縣仍来三七が告状をうへて急波
門とこゝしめ証人為六をちゝめらうて鄰家の者鳥粘の紛ゝ根拠沼
ハゝ猶戸の搦七名その外一手の老とゝべて廳前にあてきゝ　しむ。
知縣先為六ハ事の縁故と問けれハ為六ゝい出ていゝく。お秋と波つが密
通ハ已に年に余りひ小人名ゝちゝめ近鄰の者こふこれと知るゝいゝも。
父母の輩ハろうて彼名ハあざむられて山ゝとゝ知ゝ為ら住ゝ。お秋の
ごゝろんゝ為ゝて已ハ猛をゝんとまゝう成波つふく恨ミ大に強うるが昨
夜酔ハ為ゝて怒ゝ氣為ハ發ゝゝふゝお秋と殺害ハむすびいゝとゝゝふ
波つハゝひけどゝゝハれの為ゝうて山ゝ所よあゝ心中にゝひり。

八。我お秋が一旦の情に迷ひて復讐の事のすにみそこなふ。且丹下屋の大恩を忘れて。今は吳越を別にせんこと。天地神明の罰しるべし。ことふ然尼のことばに。八字の白中。得布而摘。こつと忘却して。吳越の父の仇をむくゆべき。百余里をへだてゝ遠く此地に来り。太死をうることを。忘れ行のむくいぞや。百度千度悔るなれども。さてもいづくにもいひ訳なんのと。志を勵し。羅公よりむこひていとく。お秋と密通のゆへ我今更つみなしぶるとて。羅せゝるゝ。一言といふとど速に羅に伏をべし。お秋を殺しゝるゝ実是我ふあ〳〵ど。汝行の證據あつて我ゐるゝとうこゝるや。三七いざら出ていとく。大爺彼がゝ所をと。彼奴羅の極き成而脚をかりて羅をひくさんとと。彼奴我女兒と密通のゆ已に半年余るときく。女兒其情のあるに引んこと成ずとれ。うそれて来るゆゆるれと傍はへどて。ちうぞけしるを怒て殺しゝるふうぶいなす。彼密會して女兒が房に到るの外。別に許る様上ふのぶう侍らん。是あるゝるゝる彼捜ゆう。刀剣をもひもひあるゝ。せうる裁刀をて新しゝるゝ。彼一時の怒ふせゆって殺しゝるゝゝゝゝゝこひ初がくゝ大爺こうびしく。究同のゆえさもあるぶ。彼白狀いてをゆゝしゝゝ。此知縣ハ素是悲ふゝく別所にらるゝゝゝ人ありるぶ。此時ん弁に井人らく。一四年ハ征人羅公吳れ三七年ぶゝ。知お保あるゝゝゝ。二ふふ彼つが人品とゝるに容貌美ふして性質和ゝゝゝ。人と殺さぎ様秋あゝゝゝ。これ丹ハ必別ふ孫故あるべしとゆゝひ。乃彼つふ同ていとく。汝ゆ秋がゆとて通ふ時行人ゆもあれ夜中様のゆとをゝゝゝる老ハゆをゝ。彼つ羅ていとく。あゆゝ人の通ゝとをぞ。

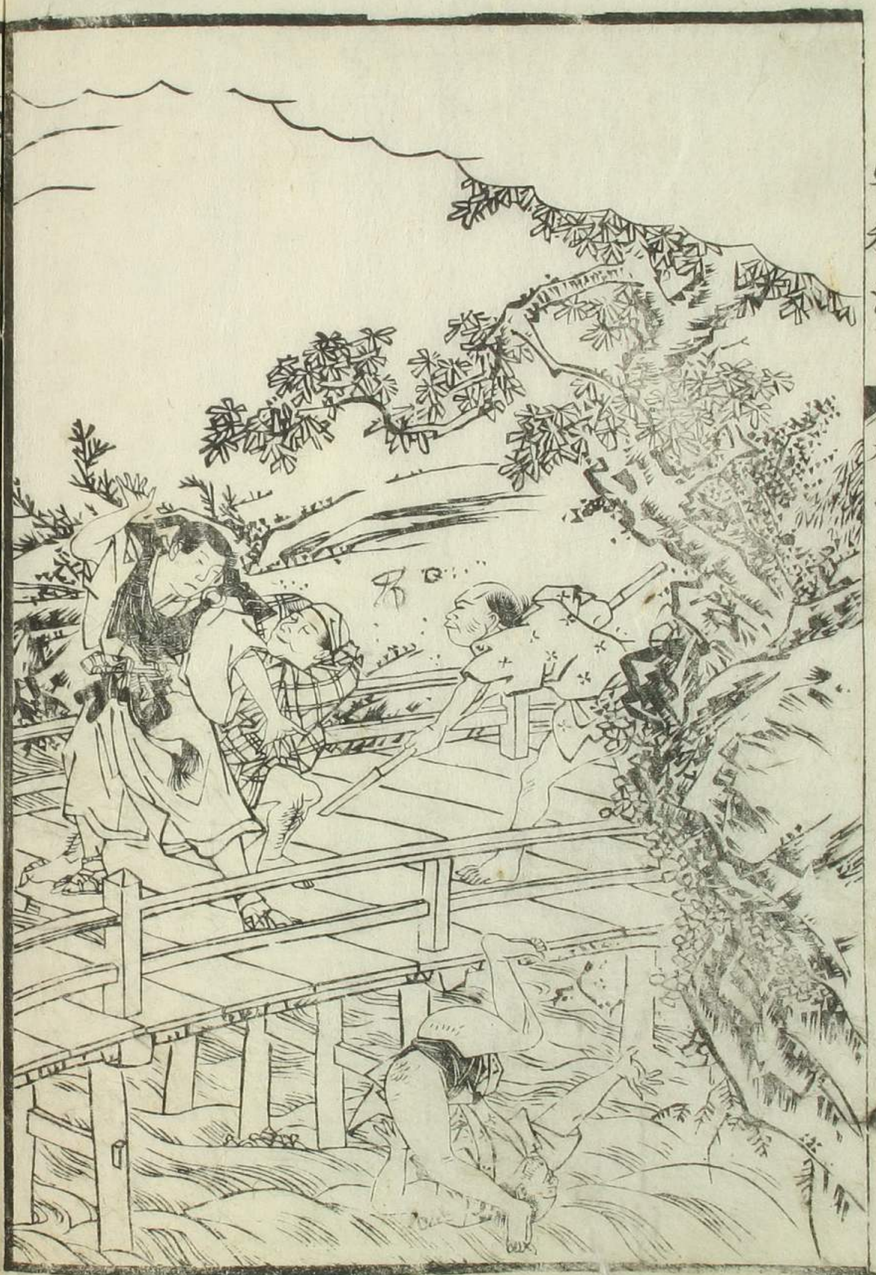
錦木塚
庵

只蕭月にかゝる一人の僧ありて。夜中鉦をならし念仏をとなへて通りゆきぬ。外には人の通りかゝるをおそれ侍らざりし。知縣これを聞て果哉とて中に點頭わざと彼僧を叱りてのたまひけるは。汝大罪犯をなしてくの其の罪をのがれんとするとも。豈よく我をあざむかんや。お秋をころしたるは汝にきはまりて明白なり。家汝を死罪にをこなひて。お秋が父母の怨をはらさすべし。速に罪に伏せよと唱令し。左右に命じ彼僧をとらへ手ごてにかけしめて獄舎にとくり。其余の者ハもべて家に皈らしむ。かくて知縣ハひんきよする両人の公差。黒河忠右。鹿角義平といふ者をよび出して。蜜に問ふハ。彼僧がつみ科の。あらく念仏を唱へて村々を勧化する僧ハいづれの所に住めるや。汝等これを知りたるかと。両人口をひとしく彼者ハ則小湊郷本塚の三昧堂に住。現西といふ僧のよしにて

とまをしける。知縣これを聞て命じけるハ。汝等両人今夜ひそかにかれて如此々々はかるべし。よく事成すならば汝等が功労を賞ずべしといふ。両人かしこみうけたまはりて立出行しバ。知縣ハうちに入て。消息をぞ待居る。扨彼現西ハ此夜も例のごとく。鉦をならし念仏をとなへて村々を徘徊しつ。三更をすぐる比彼が家にかへらんとて。御未塚の辺にちかづく時。俄に一陣の風おこりて颼々と樹梢をならし。月色朦朧として不覚にものすごくおぼえける。怪哉錦木塚のうしろに一道の陰火もえ出てあたりをめぐる。草ふかき所に虫の声かとおもふほどに。泣かなしむ声いともあはれに聞えて。一つの魂とおぼろげにあらはれしバ。現西これを見て頭をめぐらしてこれを見るに。若き黒髪を乱し。顔ハ雪よりも白く。咽のあたりより鮮血淋々て

分にまとひしうちとりの紙衾に漆のごとくなるが黒暗中にさらしておかば
げかえるべし。現西これをむしりとりて口中へ入れて苦悩
こゝあらずして忽地に倒伏して只阿弥陀仏〳〵と念ずる。幽霊白糸
のごとくなるものあげてうかがふに黒髪ばかりひらひらと見えて。且哭且叫りしかる声して
ひるがへ。妾ハ汝が毒手にかゝりて非命に死したる秋が寃魂仇をむく
いんとてこれまでもあらわれ来たるなり。汝志ひて妾と交せんとしうけひ
ざる我慢ゆえいまさ陽数もおもゝざるに。擅に妾と敎〳〵。そのうへ梯髪
種と貪ぼり。妾その姫をたゞちとさんと間罷出に訴へんと閻王ぞのいと
ゆとこゝあらず。こゝ来たりて汝が一命をとらせらる。ちらしいえども汝今先
非を悔。妾が執念の残り〳〵梯髪撥とりたゞちに汝が一命殺
敎をべし。さもあらばんが速に地獄ふみて行てがぐるべし。呵責とう

け〳〵むべしと言もあげふて。現西ハ面色槁木のごとくなれ変。始も死し
る物のごとく地ふ倒てあらるがごとくなれ敎孫をう
合掌してひるがへ。糸獨化の貞傷あれバ然仏火のごとくなりてお身
に情をもゝしたひさをうさがゞ。刹叫て人を呼りる中我人ふ
捉へられんこと代身をれて。偶ゆんをと敎せる。彼梯髪撥人ふ賣ん
とあり。ひ拾来て今牧我情中にあり。遠にこれをもどきて。こ
れより後ゆゞらく追薦をいとなみ。経とよみ仏とたゝんをす
の成仏得脱をねがひ。ゐに香燭をそなへて。幽魂を慰〳〵ゆんこひねが
くハ寃とゝし慢とやゝて我一命をゆる〳〵ゆるゝ仏果につゝる主人と
いひて改を地にうちひゝ〳〵罪と賠にゝる。時忽然として後の方
うゝ。ゆ阿太左衛角義平。女人ひ〳〵とどゝ出現西とゝ人てゝる



小夫にてうろ〻彷徨ひ。現西まもり〻おぼゆ。魂魄と失ひて。両鬼我と色
るせ〻くと叫〻ぶ。女人すぐりていろ〻。我輩ハ鬼にあらず。知縣相
公のおふせ蒙りて汝をとらへ。廳前にゐて行くべ。ずどろきもとることあ
れとも。現西ハ夢中ふるひて。只仏菩薩をとひとされ給へといひてふる
ひ居るに。女人呵〻と笑ひいふ。悲ある仏菩薩も。汝ごとき罪人
をとらへ給ふ。あるいハ女わるんや。聞話とつふことなるまといひて。索をとりて
ひきこそろうぬ。彼幽霊ハ原来假幽霊にて乃是小鰭小平次之武氏小平
次。尚地ふ芝居あるてやとられ来るに。ぶ〻〻〻逼迫してあるぶ。武氏
を義平女人にさのまれ。幽霊に扮粧巧に現西と嚇して。自然に白状をか
さりむ。彼陰火とえ〻しハ芝居ふてもちる焼酎火とつるのあるに。
知縣の知計ちる出〻るふてぶ〻らに拷問とくとして黒白とろへの去

らさるうこそ。次の日にいろ〻。患を義平女人現西をひきさ。小平次をとれ
て。知縣の前い出。事の子細と訴へ。お秋と彰〻い現西ハ所為あり
と彼みづ〻〻いふをいちく〻ふ告〻ぶ。知縣大ふろこひ。お秋ハ父三七。
証人為ニ。弟に彼つ。其余一干の者ども。とびぶ〻。因現西ハ彼衣乃
うちろ。掃髪掻と探出〻ニ七にえせしもるに。是乃お秋が首の紐ふ
ぬきれるるれ。現西いよ〻〻あらがふ。問ふ〻して〻く白状〻。死
罪に伏〻るふぞ。知縣為古に對〻て汝私の迷眼ふろ縁故あれ
と〻ぶ〻武以て証人〻ふ。ニ七をとらへて訴へ〻ぬ彼門ふ寄庭
の罪とおもきん〻〻る罪科ふ〻ぶ〻とつ〻ぶ。今殺人知とるとふ人
罪五分を申る。百棒〻〻〻めて郡の境と追〻るつ〻ぶ〻といひきる。又
彼門に對〻て。汝お秋と密通〻。和中ニ七が様ふ思ひ通ひ〻ハ。

罪なれば、あるべきとはいへども、原は秋が縊死んとするを嫌しなり。夏、起るを待ちて
ちからく其罪を赦して、ゆるやかに放らんとぞ、いひてやまんとすれば、
やがれば波は只龍潭を避て虎穴を逃るるなり。相公の仁恕
あるべきなれば我忽圉圄の鬼となるべし。相公は我を救ひて再生の父母なり。
大恩いづれの時か報ぜんといひ、さめざめと感謝してよろこびぬ。
知縣又金五両とうて小鬟小平次あるを銀子とうて忠を義を
あらはすべきなりとて、その切労を賞し、二手の者どもをえらびて退かしめ、
皆く知縣の判所あらはして賞罰の正しきを感じ、拜謝して
家かへりぬ。かくて波門は幸ひして災を脱れしかども、なほ
なれば、是もいとうく思ひ、且仇人のゆくへをも知ざれば、ひそかに
ひと程の日を窮志とすぐる朝あるに、ぬしうへは諸国をめぐりて、ゆくへを探

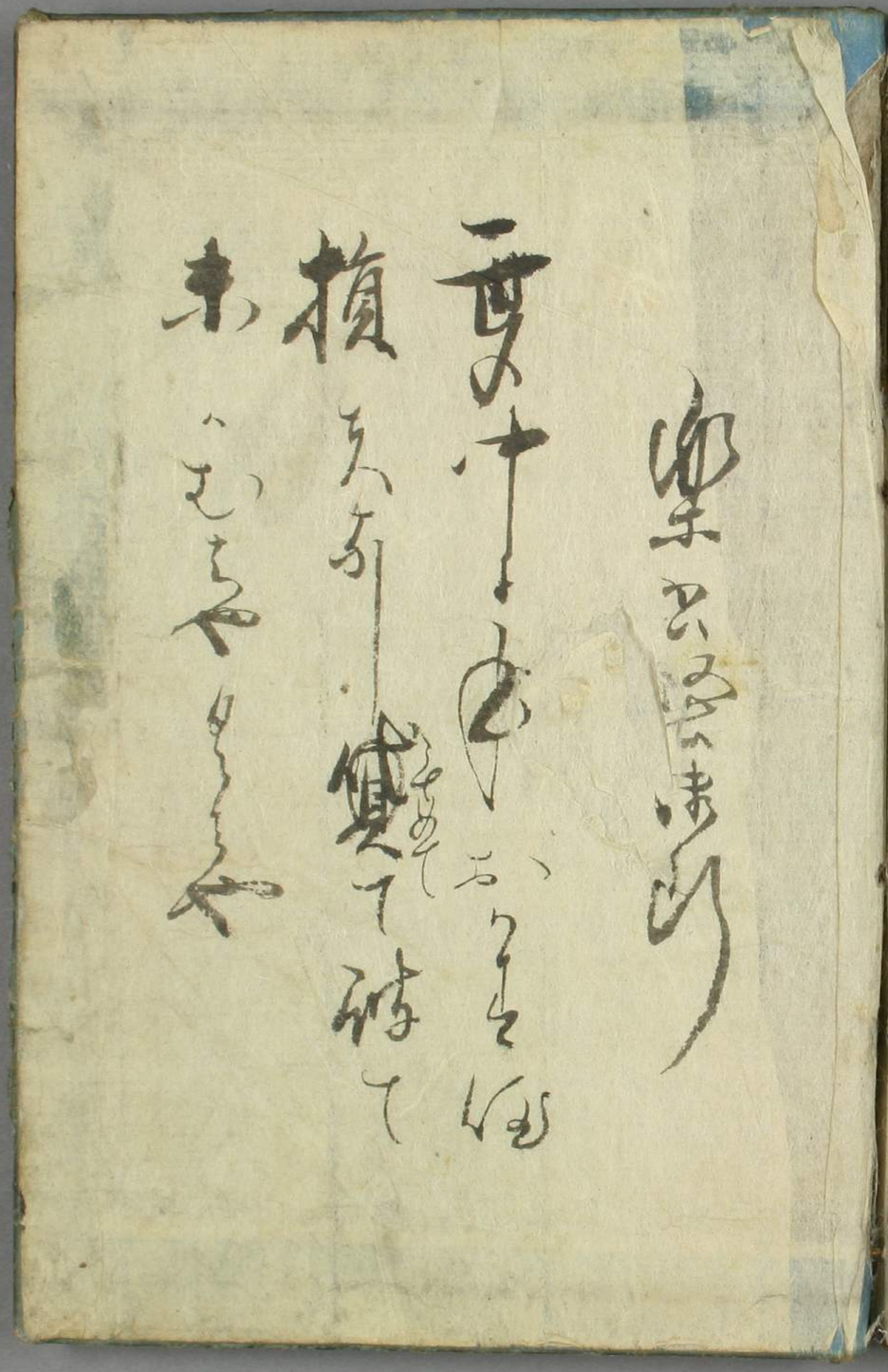
ふ。ちかごろ思ふ案をとりあつめ、俄に家をうりはらひ、旅虚無僧ふうと変して、
秋末に彼里を立ちぬ。若仇人奥ふかくかくれしかども、知るべからざるをおもひて
津姫の方をたづねんとぞ、はるばる青梅の渓に赴くやと走去りぬ。時しも
秋の末にて、物うくの淋漓霄よりはらくそぞきぬる。血涙の比に
いとう空ときしく晴て、明月澈水に入れ印し、栖鳥已れ曉色に
迷へる比、波門行のゆくもあるべき一つの橋とおぼしき所に、號笛とおぼしく一声きこ
えわたるが忽竹林のうげ、枯草の裏にかくれしかども六七人の男大腰刀をた
びてあらはれいで、波門とまをにひらけばとて、一言の門答もえもいはざる
前後よりうちつれて、安二安三にとらへんとす。波門はおりひがけうな
ほ方程にも大丈夫の魂なれば、這奴等は賊人かと
うべしさもこのごとあり。何程の事もあらん家学をひ得たる術は

かゝる時こそもらうべき秋と心中に会ひ、身を撓り衛を売りて一人と搖の上に踊倒し。又一人とらん勢につきて投るゝ後ぶ男ひ、けども搦手とうちこ。川に撞とうちこゝぬぶうち頭とみづ、きへ男。波つが眼あらうふ手快とうんて。よどうにぬんかのかまとと力と抜てかゝるし。ふ。嘉余の者も面くれカとうるひてむひうち。波つ月のをうゝて大男が面をとゝるれ武者ハ彼義六ゝうり後ぶ大ふうづうて いとく。波ハ処ゆゝうしてゝ又我と害せんともるゝ。我こそ義の敵と好ぞとい人ども。今ハゝや敵ーぶこ。ゝうひて爺武ふ仕こゝる氷のでとれカと抜ーゝやく地獄ふ去けとい。いてゝどうゝ上りて義六ゝ肩尖ゝう瞎とうけて斬つけゝれば。阿と叫ぶひまもなく忽あ眼に ゝうれて地上に撲地ゝうれゝう。其余ゝ人の悪棍ども。ゝ四方

ゝう狂ゝも知と。ゝを閉て踊倒し。跳越て後ふあゝうれ。其敏さし 恰も雲ゝ百に因電光にひ、ゝく。水上に龍ゝ燕子れ似て。彼牛若 丸ゝ五條搖のそゝゝれと。今まれあゝうゝるゝぶゝ。ぶゝゝくれ間ふ之 人と斬敵を。ま余の者も或ハ武夏拳を義敵ゝれゝうて逐去 ゝう神ゝ。波つ退ゆれて尽ゝく敵ゝんと神りひしゝぶ。彼ゝを敵ゝ。ゝうた 義義ゝうゝゝぶゝうて。川糸に神ゝゝう。ゝかゝゝ衣服れ濺ゝう血とあゝ ひゝゝうゝ。つひふ恰糸と奔ゝ去ゝうぬ。彼義六前ふ彼門と矣人と 計ゝう。ゝうて神の主一衆ゝうれ郡の境とゝゝれて。ゝ逆服ゝれを。彼 門ゝ武ゝを。ゝゝゝ。男彼つハ武藝の達人と。ゝれば。人の。ゝゝ さゝゝん勝れまゝと思ひ。ゝ氣ゝ求る悪棍ども。ゝゝゝひ武ふゝゝ 居て事を仕損ゝうゝて。ゝれ名一令を神ゝゝゝ。原義六ハ義悪

おりゐ者ふて。そ余の者も盗賊のさぐひ又れば後日新人の食
もの〳〵そ侍ふそあるかこれ波門ゞ月の幸あるゝ。扨又須賀屋之
七ハ。女児お秋ゞ非命に死しるとゝ安とうたてこれ井りへて家
を窮の基に成ぐゝ。おのれい死をあゝ〳〵幸〳〵死とこゝふまて安積沼
須賀川の猟にゝられ。深く仏ゝ入りて文孫の事ゝハ。九十余歳
まて正念往生をとゝげるゝそ。俳諧士芭蕉ゞ奥の細ゝ小須ケ川の
宿のゝさゝ〳〵れ大き多栗の木の陰とゝの安ゝいゝ侍あゝし
られて

安の人ゝ見ぬ花や軒の栗

〳〵ゝ〳〵ハ公三七道ゝの事ゝと陸奥人の物語ゝ安ぬ

安積沼巻之三畢